

前近代中央アジアにおけるマドラサのカリキュラムについて —ペルシア語文書史料をつかったところみ—

2001/05/26(Sat.)
イスラーム地域研究6班研究会
於:東京大学文学部アネックス
磯貝健一(京都橘女子大学非常勤講師)

概要

本発表は、ウズベキスタンとロシアの関係諸機関に所蔵されている古文書をもちいて、前近代中央アジアのマドラサにおける知的活動をあきらかにしようとするものである。使用する史料は、ウズベキスタン共和国の中央古文書館 Центральный государственный архив Республики Узбекистан(以下 ЦГА と略記)に所蔵されるワクフ文書、およびロシア共和国国民図書館写本部局 Отдел рукописей российской национальной библиотеки(以下 ОРРНБ と略記)に所蔵されるマドラサ関連の各種文書である。

諸史料を検討した結果、マドラサで実施される授業のほとんどはハナフィー派法学の教育にあてられていたこと、また、マドラサの課程は、アラビア語文法の学習からはじまり、諸々の段階を経て、最後に法学の修得をもっておわるものであったこと、等の事実が確認される。

1 史料をめぐる問題

1.1 既存の史料について

個人のメモワール、人名伝等の伝記史料：学生生活におけるエピソード、学校内の人間関係などについては重要な示唆をあたえるが、具体的にどのような授業がおこなわれていたのか、というような当人にとっては当たり前の、日常的なことがらについては記述がとぼしい。

施政の手引書類：制度上、ないしは理念上あるべき学校運営の在り方が呈示される。実施されるべき授業科目などについても記述される場合がある。ただし、それがどこまで実態を反映したものなのかは、各種史料との比較により検討されねばならない。

ワクフ文書：経済的な運営面しかふれていない。スタッフ、学生への給与支給額、簡単な校則等々。ただし、図書館に寄贈された書籍のワクフ文書は、マドラサの知的活動を解明するための手掛かりとなりうる。これについては後述。

イジャーザト・ナーマ *ijaḏat-nāma*：学生がそれまでにその内容を修得した書籍の名称が列挙される。マドラサの教育活動をあきらかにするためには最良の史料。ただし、これらの書籍をどのような順番で学習していったのか、というプロセスが不明瞭。

1.2 新出史料の可能性

発表者がウズベキスタン共和国で複製した書籍のワクフ文書と、ロシア共和国で閲覧、書写した各種マドラサ関連文書について。

1.2.1 書籍のワクフ文書

所蔵機関はウズベキスタン共和国中央古文書館 ЦГА。科学アカデミー東洋学研究所の Галиба Джураева 博士の紹介による。

書籍のワクフの合法性については、書籍が動産であり、ワクフという行為に必須の「永続性」を保証するものではないことから、ハナフィー派内にこれを否定する意見もある(アブー・ハニーファとアブー・ユースフ)。ただし、ハナフィー派に属する大多数の法学者達は、すでにそのワクフ化が慣習となっている動産についてはその合法性を認める、とするシャイバーニーの学説を支持している。[see Kitāb al-Waqf, *Hidāya*]

マドラサ本体のワクフ文書の一部をなす場合も、また、独立したワクフ文書として作成される場合もある。本発表で使用するのは、所蔵番号 ф.323, оп.1, ед. хр.1 文書で、16世紀後半にブハラに建設されたキョケルタシュ・マドラサのワクフ文書。

1.2.2 ムダッリス mudarris の担当授業一覧表

ロシア共和国国民図書館写本部局 ОРНБ 所蔵。所蔵番号は Кауфман №141, 142, 143。なお、同機関に所蔵されるペルシア語文書については、О.М.Ястребова, *Персидские и таджикские документы в отделе рукописей российской национальной библиотеки*, Санкт-Петербург, 1999 というカタログが出版されている。

初代トルキスタン総督カウフマンが中央アジア征服のさいに収集した史料群の一部で、作成地はいずれもサマルカンドと推定される。おそらくは19世紀のもの。

1.2.3 「学生の心得」文書

ロシア共和国国民図書館写本部局 ОРНБ 所蔵。所蔵番号は Кауфман №144。作成地不明。おそらくは19世紀のもの。

2 各種史料が描き出すマドラサの知的活動

2.1 施政の手引書にみえるマドラサの授業

16世紀初頭にイランから中央アジアに移り住んだ Ibn Rūzbihān の *Sulūk al-Mulūk* に見える「在るべき姿」としてのマドラサ像。マドラサでの履修科目についての叙述。

聖法に関わる諸学 (‘ulūm-i shar‘īya) とはいずれの学問を指すのか、ということとはウラマー達のもとでは周知の事柄である。要約していえば、聖法に関わる諸学には三つの範疇がある。第一の範疇は聖法の学 (‘ilm-i shar‘) と呼ばれるもので、ハディース学 (ḥadīth)、コーラン注釈学 (tafsīr)、法学 (fiqh) がこれに当たる。第二の範疇は聖法に関わる諸学 (‘ulūm-i shar‘īya) と呼ばれるもので、これは聖法 [の学] (shar‘) がこの範疇の学問に依拠しているところからその名が付いたものであり、この範疇の学問は基礎理論 (uṣūl) の面で聖法の学と結びついている。この範疇には二つの学問が属しているが、それは思弁神学基礎理論 (‘ilm-i uṣūl-i kalām) と法学基礎理論 (‘ilm-i uṣūl-i fiqh) 等である。第三の範疇とは、シャリーアがアラビア語であっ

て、コーランもスンナもまた同じ言語で下されたものであるがゆえに、上記二つの範疇の学問の修得がこの範疇の学問に依拠しているような種類の学問である。これはたとえて言えば道具に比せられるようなものである。この範疇に入るのは、文法と語形論 (naḥw wa ṣarf) や語源学 (ishtiḳāq) や修辞学 (ma‘ānī wa bayān wa badī‘) およびこれに類する学問といった、文語アラビア語の諸学 (‘ulūm-i ‘arabīya-yi adabīya) である。

さて、これら三つの範疇から外れるものは哲学系諸学 (‘ulūm-i falāsifa) に属するものである。この内、医学 (ṭibb)、算術のごく一部 (ḥisāb)、そして論理学 (maṭṭiq) は必要なものである。まず、算術が必要なのは、法学の若干の部門で代数と、算術を用いた手続きとが必要とされるからである。次に、論理学が必要であるのは、何らかの意見を審理する際に、また審議される内容が真であるか偽であるかを知る際にこれが必要となるためである。思弁神学者は必要最小限の程度の論理学を思弁神学の体系の中に含めているが、これは聖法に関わる諸学を発展させるにあたり、これに属さない学問を不要と為すための処置である。ゆえに、論理学に関しては、思弁神学者が述べているようにその概要のみで十分とすべきであり、必要以上にこれに耽溺することは妨げられるべきであって、相応しいことではなく、むしろそのような行いを禁じることこそが義務行為である。一方、医学については、治療行為を行うために必要な程度であるならば、これに従事することは禁じられるものではない。また、算術であるが、これが如何なる場合に必要となるかについては、ウラマーが法学のいろいろな部門のなかで説明している。[以上述べてきたことからわかるように]、哲学関係の書物は必要のないものなのである。ウラマーのなかには、ビドアへの論駁は集团的義務であり、論駁するからにはその対象を具体的に知っておかねばならず、それゆえ、その論駁と否定のために哲学を学習するのはやむを得ないことであると言う者もあるが、その際どの程度これを学習すべきかについては思弁神学の書物で述べられている。

[*Sulūk al-Mulūk*, テヘラン版, pp.97-8]

2.2 書籍のワクフ文書に見えるマドラサの蔵書

総数 341 点。ただし、一つの作品につき複数の写本が所蔵されているケースが多いので、作品数はこれよりもすくない。同一の作品が別個の呼称で記載される場合もあり、正確な作品数を確定するのは困難。

図書は コーラン注釈 (tafsīr) ハディース学 (ḥadīth) 法学 (fiqh) 修辞学 (‘arabīya) 思弁神学 (kalām) 辞書 (luḡhat) スーフイズム (taṣawwuf) アラビア語文法 (naḥw) 論理学 (maṭṭiq) 哲学 (ḥikmat) 医学 (ṭibb) という計 11 の見出しの下に配列され、さらに、文書の末尾には様々な分野にわたる 15 冊の写本の目録が追加されている。配列は右から左へと進むが、例えば *Hidāya* のように同一作品について複数の写本が収められている場合や、「*Hidāya* の注釈」などの形で複数の作品が一つのグループとして取り扱われる場合、こうしたグループは一本の「柱」を形成し、その「柱」の内部で右から左への配列が為されている。

所蔵図書の分野は Ibn Rūzbihān の記述にほぼ一致することが確認される。

2.3 授業一覧表にみえる科目と授業時間

2.3.1 テキスト一覧

1. 法学

- (a) *Hidāya* : Burhān al-Dīn ‘Alī al-Marghīnānī (d.1197), *Hidāya*
- (b) *Sharḥ-i Wiqāya* : ‘Ubaydallāh b. Mas‘ūd Ṣadr al-Sharī‘a al-Thānī al-Maḥbūbī (d.1346), *Sharḥ Wiqāyat al-Riwāya fī Masā’il al-Hidāya*
- (c) *Mukhtaṣar-i Wiqāya* : do., *al-Nuqāya* or *Mukhtaṣar al-Wiqāya*

2. アラビア語文法

- (a) *Kāfiya* : Jamāl al-Dīn Abū ‘Amr ‘Uthmān b. ‘Umar b. Abī Bakr b. al-Ḥājib (d.1249), *al-Kāfiya*
- (b) *Sharḥ-i Mullā* : ‘Abd al-Raḥmān al-Jāmī (d.1492), *al-Fawā'id al-Diyā'riya* (上記の作品の註釈)

3. 神学

- (a) *‘Aqāyid* : ‘Aḍud al-Dīn ‘Abd al-Raḥmān b. Aḥmad al-Ījī (d.1355), *al-‘Aqā'id al-‘Aḍudīya*
- (b) *Mullā Jalāl* : Jalāl al-Dīn Muḥammad al-Dawwānī (d.1503), *Sharḥ al-‘Aqā'id al-‘Aḍudīya* (上記の作品の註釈)

4. 哲学

- (a) *Ḥikmat al-‘Ayn* : Najm al-Dīn ‘Alī b. ‘Umar al-Qazwīnī al-Kātibī (d.1276 or 1294), *Kitāb Ḥikmat al-‘Ayn*

5. 論理学

- (a) *Shamsīya* : do., *al-Risālat al-Shamsīya fī al-Qawā'id al-mantiqīya*
- (b) *Ḥāshīya* : al-Sayyid al-Sharīf al-Jurjānī (d.1413), *al-Kūchak* (上記の作品の語釈)

2.3.2 授業一覧

Madrasa-yi Shīrdār : 総授業コマ数不明。内訳は、法学 (*Hidāya*, *Sharḥ-i Wiqāya*, *Mukhtaṣari Wiqāya*) が 5+? コマ。アラビア語文法 (*Kāfiya*, *Sharḥ-i Mullā*) が ? コマ。神学 (*‘Aqāyid*) がやはり ? コマ。哲学に関しては、*Ḥikmat al-‘Ayn* という記載があるにもかかわらず、授業が行われたかどうかさえ不明。

Madrasa-yi Safīd : 総授業コマ数 12 コマ。内訳は、法学 (*Hidāya*, *Sharḥ-i Wiqāya*, *Mukhtaṣari Wiqāya*) が 9 コマ。神学 (*Mullā Jalāl*) が 1 コマ。哲学 (*Ḥikmat al-‘Ayn*) が 1 コマ。論理学 (*Ḥāshīya*) が 1 コマ。

Madrasa-yi Shaybānī : 総授業コマ数 21 コマ。内訳は、法学 (*Hidāya*, *Sharḥ-i Wiqāya*, *Mukhtaṣari Wiqāya*) が 17 コマ。アラビア語文法 (*Kāfiya*) が 2 コマ。神学 (*‘Aqāyid*) が 1 コマ。哲学 (*Hikmat al-‘Ayn*) が 1 コマ。

2.3.3 マドラサの実像

基礎を習得するための授業

イジャーザト・ナーマに記載される書籍数とくらべて、マドラサの授業で扱われる書籍の数が極端にすくない。また、たとえば法学の授業でもっとも多くの時間が割かれる *Mukhtaṣari Wiqāya* は、じつはもっとも単純で簡単な法学書である。

授業はあくまで基礎的知識の習得が目的であり、研究者を目指す学生は通常の授業のほかに、おそらくは教授と一対一、ないしきわめて少人数の学生だけが出席する場で知識の伝達を受けたと推測される。

強固な伝統

授業であつかわれる書籍は、16 世紀の書籍のワクフ文書にも多数見られるものばかりである。つまり、数世紀を経ても中央アジアの知的枠組みは依然として変わっていない。各時代の要請により、政治的意図をもったマドラサ建設が実行されたなどによく言われるが、これだけ強固な保守的性格を持つマドラサのカリキュラムに、一時代の状況を反映させることなどできるのか？

2.4 「学生の心得」にみえる修学の過程

「わたくしたちはこのように勉強します。まずは *Awwal-i ‘Ilm* を読みます。これが終わったら、つぎに …」ではじまる用途不明の文書。

じつは、内容の類似したもう一通の文書が存在しており (OPPHB, Кауфман №144)、末尾には同一のチャガタイ語とペルシア語のフレーズが付け加えられている。「善行にはげみ、悪い業 (*diryāk*) はすてよ。ちゃんとした知識があるかないかは神様がよくご存知。欲せよ、さればそれを得ん。」これは学生に対する叱咤激励のメッセージと考えられるが、ならばこの文書は「学生の心得」として、これから学問の道に進まんとするマドラサの入学生に配布されたものではないか？ なお、同様の用途で学校の壁に貼られたものである可能性もあるが、現物を実見したかぎりでは、壁などから剥がされた形跡は見当たらなかった。

この文書によれば、当時の修学の順序はつぎのようなものであった。アラビア語文法 論理学 神学 哲学 基礎法学理論 ハディース学 コーラン註釈学 法学。 *Awwal-i ‘Ilm* に始まり、*Hidāya* の習得をもって終わるプロセスである。

3 おわりに

ロシアの征服を経てソ連期に至るまで中央アジアは激動の時代を経験するが、マドラサで教育を受けた知識人達は、この時期も一貫して中央アジア社会におけるエリートであった。19 世紀から 20 世紀、彼等は社会の革新を目指す側とこれを押し止める側とにわかれはしたが、その一方でおなじ知的伝統を共有していた。マドラサのカリキュラムを研究することには、変革期

を生きた知識人のメンタリティーを明らかにするという意義もあるだろう。